

祇園のお茶屋さんでの茶会

5月の東博での茶会のときに今川憲英さんが見えになられて、「昨年京都のお茶屋さんで2畳のお茶室を造ったんですよ。壁全面を鏡にして、鏡庵というんですけどね。お茶室にして炉を切ったんですけどまだここでお茶を喫んだことがないんです。一度いらっしゃいませんか」とのお誘いである。隣に10畳の間があるので、やすみりえさんに川柳で遊んでもらったらどうか。そんなことから「えんとむえんの会・茶と川柳バージョン」が始まった。



場所は京都祇園花見小路のお茶屋さん「松八重」。時は7月17日、祇園祭のまっ最中である。



今川さんと私の呼びかけで、これはという粋人が集まった。造形家の近藤高弘さん、菓子老舗老松の太田達さん、東京電機大学学長原島文雄さんご夫妻、橋弁慶山保存会の瀬戸川さんご夫妻、情報メディア学の高橋時市郎さん、鳥取より老舗呉服店店主平野美智子さん、建築家の濱口恵子さん、女性航空パイロットの岸田京子さんデザイ

ナーの森清さん・・・それに「松八重」のおかあさん、舞妓さん芸姑さんの綺麗どころ。

そして、首謀者の今川さん、やすみさん、と佃

ゲームは15時開始。ルールは鬪茶本非当て、川柳お題「本」は「小」、「非」は「鏡」、つまり客は前席で全員に配られたお茶をのみ、茶席に入って新たに淹れられたお茶が前席で飲んだものと同じと思ったら、「小」の題で一句詠み、違うと思ったら「鏡」の題で一句詠む。それを茶席終了までに読むというモノ。

さて、茶席の道具組。掛け物は青木木米の煎茶の図。長板代わりとして九鬼

家で愛用されていた鏡板を敷いて、水指は近藤さん自作お持たせの青釉銀嶺の大振りのモノ。石路の葉、「まとも」と「斑入り」を二枚重ねて葉蓋にする。敷板代りに葉蘭を敷いて、茶器は馴染みの円式煤竹組込茶器を鍋島更紗の上に設え、茶合は松材、杓は瓢を用いる。盆は錫板、茶碗は古安南茶巾箱にイタリア・オルビエートの陶器を用いる。詳しくは写真をご覧ください。



大笑い有り、愚痴有り、嘆き有り、舞妓さん芸者さんの踊りありであっという間の4時間。予定時間を幅に通り越して、気が付けば東京組は早最終時間。やれ、秀句を残して京都駅に一目散・・・でした。

えんえんと乙女心の映り込み（恵子）

- ・一人でも 百の心 鏡の間（憲英）
- ・雨あがり 恋する鏡 よく光る（りえ）
- ・姫百合の 鏡に映る透明感 （一可）

